斎庭

小國神社や周囲の森は聖地と見なされ、「斎庭（ゆにわ）」と呼ばれています。この言葉は、「浄化」「崇拝」の意味の「斎」と、「庭園」の意味の「庭」という漢字 2 文字からなり、720 年に編纂された日本の歴史の年代記『日本書紀』に記載されています。斎庭の概念においては、聖地は神々を敬うための祈りや浄化という要素と結びついています。この概念は日本人の宗教観の中心にあり、神道に一貫して流れています。

太陽の女神である天照大神の孫息子、瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)が、神々の斎庭から日本に稲をもたらしたと信じられています。それ以来、米は日本の主食となり、神道において極めて重要視されています。小國神社では神々からの米の贈り物を瓊瓊杵尊に感謝する祭りを毎年秋に開催しています。